

インデイステイメント+Q

第10話 来訪者をどう思うか

庫発りべるき

本書は体験版です

〈はじめに〉

本編をお読みになる前に付属の利用上の注意をご確認ください。

〈本編開始〉

一九八七年 富山県魚津市――

そんなに大きくはないであろう道路。自転車が数台走っている。

運転しているのは男子中学生だった。彼らは今、目的地に向かって走っている。

と、言うべきか――

その様子から獲物を探している、と言ったほうが適切な表現かもしれない。

そしてついに「獲物」を見つけたのである。

奴らにとつての「獲物」――それは市内の小学校に通う小学四年生の男子児童だった。

集団で執拗に追跡し、故意に自転車をぶついたり、自転車に乗った状態で蹴ったりしたのである。

苦痛から表情をゆがめる小学生。それを楽しむかのよう
に攻撃を加える集団。

この出来事は、平成生まれの現在二十六歳の男性である
俺がまだ、生まれていなかったときのものである。

まさかその出来事から俺が「インディスタインクト
プラスキュー」になろうとは――

その小学生は、誰にも助けを求めなかった。

助けを求めればよかったのではないのか？そう考える人
もいるかもしれない。

だが、当時のイジメに関する考え方の実情を知っていれば、
むやみにあれこれ言わないほうがよさそうだ。

地域や個人によつて考え方に差はあっただろうが、こんな
考え方がまかり通っていたのである。

苦痛や恐怖に怯える表情をするから相手が面白がつて攻
撃がエスカレートするんだ――なんて言い草で、あろうこ
とか被害者を責め立てる風潮が強かった世の中である。

この男子児童も自分の親に被害について話をしたのだが、
親が「風潮」に染まっていたらしく、逆に自分が責められ

る結果になってしまったのである。

男子児童は自分が通う学校の先生にも相談したが、そのときの反応もいいとはいえないものだったようだ。

「加害者に近付かないよう気をつければいい」「暴力に負けない強い心を持つべき」と、一見聞こえがよさそうな言葉かもしれないが肝心の加害者対策については認識が薄い、といった反応しかされなかったという。

この小学生は当時、こう思ったようだ。

自分が近付かないようにしていても、加害者達から近寄ってくるのは予測しようが無いのに……と。

また、こうも思ったようだ。悪いのはあの中学生たちなのにどうして自分が「頑張る」ことを求められなくてはならないのか、と――

加害者の暴力による精神的に支配された状況に加え、親や周囲の大人たちの言動によるショックも重なり、どうせそういった形でさらに被害を受けるのだから、と、泣き寝入りするしかないと思わせる心理状態になったのだろう。

ちなみに二〇一五年の今、道路交通法が改正され危険な自転車の運転をした者は、場合によっては講習を義務付けられることになる。

この男子中学生達は一度や二度ではなく、幾度となくこんな自転車の使い方を男子児童に繰り返していたようだ。

我々が当時のこの中学生達のやったことを現在真似したらどんな代償を払うことになるのか。

俺がその事件について少しづつ知るようになったのは、ある日の友人達（全員男性）との飲食がきっかけだった。

現在四十歳から四十一歳の男性数人が、俺達と同じ飲食店で何らかの会話を交わしていた。

酒がかなり入っていたのだろう。

動画のシーンで聞こえた会話。ずいぶんと楽しそうだが

……

――俺達昔、人を自転車で追い掛け回したことがあったんだよ。

――「助けて」って泣き叫んでいたよな。

――ああ、アイツのことか。

「なんかヤバそうな会話してねえか、アイツら」

友人の一人（二十六歳）がつぶやいた。

なぜか俺達は警戒した。

自己快楽のために自転車を凶器に使った過去を面白おかしく言う奴ら。

多くの人々に広めたい。俺達はそんな思いが強くなっていった。

その思いを実現するべく、俺達が取った行動――

後日俺は、とある動画サイトに奴らの発言を公開した。

あのとき、俺を含めたその場に居合わせた数名がスマホ

でそのときの奴らを撮影していたのである。

公開には俺が撮影したものを使うことにした。

但しネットで不特定多数に公開する以上、ある程度は個人情報保護の保護処置が必要になると考え、その判断に基づき加工した動画を公開したのである。

俺は動画説明文をこのように書いた。

彼らがやったとされることはヒドイものではあったが、だいたい昔の出来事ゆえそのこと自体を理由にあまり強く批判するのは行き過ぎになるかもしれない。

しかし、である。

大声で楽しむかのように語るような話ではない。それをわきまえなかつたのは問題だ。

酒に酔った勢いで済むことかと思ひ、たまたま録画したものをネット上で公開した。

趣旨はこんな感じである。

まあ、間違っても快楽目的で自転車で故意に人にぶついたりなんて話、自慢げに語るものではない、な。

〈続きは製品版で〉

著者 庫発りべるき

発行 データコーディネートフォルダー

二〇一五年八月二日

(C) Kohatsu Riberuki